

B—25 被服構成に関する教材研究
袖の構成における機能的考察

岐阜女子短大 道家 三季
○大竹 節子

1. 被服構成教育とは「着衣するもの」を作る実習の教育である。文化的性格を理解しながら、日常の中に教材を求め、人体を基として構成実習する教育である。一般には「この位は縫えなければ」と言うような「女芸」の域を出ない考え方の基に能率的で早く美しく作品が得られればよいと言う見地から伝習的な作業的訓練に流れ易い傾向にあるように思われる。人体の動きによる体形の変化ならびに機能の考察・機能量と寛度の関係等を理解し製図との関連性の上にこれ等を分析して原理的理論を製図上に理解した学習指導であらねばならない。指導者としてどのような小さなことにもよく「観察すること」「考察すること」「工夫すること」等を通して未来の衣生活の創造を期待できることに役立つような教材の取り挙げ方を手近で簡単なものから少しずつでも進めながら被服構成教育の基礎的なもの原理的なものを少しでも見出してゆく方向を探りたいと思っている。

2・3. 腕の動きを上下運動と前後運動に分類することができるのではないかと考え、これを製図上どのように理解すればよいか、その位置と在り方を検討した。

上下運動については、すでに研究されているようであるが、前後運動については明らかでない。製図的理解として前後運動と共に上下運動をも考えたいと思う。上下運動の機能が袖幅中心付近にあるのに対して、前後運動の機能は袖山の中心付近にあると考察した。なお、腕が静止の状態にある袖と、上に移動した状態にある袖においても比較検討を試みた。その結果としておよそ同量の機能と率を有することが判明した。